ベルシェロン教授逝く

ベルシェロン・フィンダイゼンの降雨機巧に関する氷晶説で有名な，Prof. Tor Bergeron が，1977年6月13日に逝去された．1966年8月15日に75歳の誕生日を祝って，友人，同僚，弟子たちが寿像を贈ったという便りを聞いたことがあるから，同博士は1891年の生まれで，亡くなった時は86歳に近かったわけである．

彼は，ストックホルムで大学を終えてから，隣国ノルウェーのベルゲンのV．ビャークネスが率いる若い活動的な気象研究者の仲間に入った．これが，後にベルゲン学派とかノルウェー学派とか言われる人たちである．前の中央気象台長藤原咲平先生も，1920年代の中ごろベルゲンに留学されたことがあるから，そのころ一緒だったのではないかと思う．このグループの人たちは，V．ビャークネスの理論を毎日の天気図に適用して，今日ごく普通に使われている，前線とか気団とか，あるいはその他の新しい概念を気象技術に導入した．これらの発見に対するグループ内の各個人の貢献度を分離することはむずかしいが，彼は閉塞の概念をはっきりさせた最初の人として知られている．

ベルゲンからオスロに移り，さらにドイツのライプチヒに行って研究した．スウェーデンに戻ってからは，ストックホルム気象台，ストックホルム大学，ウプサラ大学で研究と教育に従事した．ウプサラ大学には定年退職まで在任した．

この間，1928年～29年にはマルタにある気象台で訓練コースを指導し，1930年代の初めにはソ連へ2年間講義に行っている．この時の聴講者の中にS.P.クロモフがいて，例の "Einführung in die synoptische Wetteranalyse" (1940，最初はロシア語版）ができたので，あれを見るとベルシェロンの考え方がすっかりわかると言われている．第2次世界大戦後は，アメリカとユーゴスラビアに長い講演旅行をした．

研究論文は天気解析に関するものがむしろ主で，著書もV．ビャークネス，J．ビャークネス，H．ソルベルグとの共著で，"Physikalische Hydrodynamik"(1933)があり，1939年には6か国語の気象辞典を出し，また，1958年には "Dynamic Meteorology and Weather Forecasting" を共著で出している．

降雨機巧に関する氷晶説は，1933年に IUGG の第5回総会がリスボンで催された時に発表したもので，IUGG総会論文集に印刷されただけで，それが手に入りにくい印刷物なので，日本の学界にはなかなか紹介されなかった．1938年になって，ドイツのフィンダイゼンがこれを祖述して Meteorologische Zeitschrift に発表した後，やっと注目されるようになった．今日では両者とも本学会の外国文献集に採録されているので，容易に見ることができる．ラングミュアその他が1948年に行なった，飛行機で過冷却水滴の層雲の上を飛びながらドライアイスの粉を落して雲を変形させる実験は，ベルシェロン・フィンダイゼンの学説を自然の雲について実験的に確かめたものであった．この後，ベルシェロンの関心はこの方面にもかなり向けられるようになった．

彼は1960年にウプサラ大学を退職したが，研究は引続き続けていた．晩年の研究の題目は，"地形による降水量変化" の問題に関連していた．

彼の気象学に対する大きな貢献，および，IMO, WMO の各種委員会，および，作業委員会の委員として貢献した功績に対して，WMO は 1966年9月に第11回 IMO 賞を贈って表彰した．

彼は，1965年5月24日から6月1日まで，東京および札幌で催された国際雲物理学会議に参加する予定であったが，間際になって取消してきて関係者一同をがっかりさせた．彼は，飛行機が嫌いで，船で来る予定だったのだが，体の工合が少し悪くついに実現しなかった．そのかわり，大分長い，少し変わったオープニング・アドレスを送ってきて，それをイギリスのメーソンが感激をこめて代読し，聴衆に強い感銘を与えた．ベルシェロンの考えは，これからはミクロの問題と考える雲物理と，マクロに扱う総観気象，気象力学が一体となって進むべきである．そうすることによって，天気や気候の制御も可能となるであろう，というもので，このくだりではアフリカの地図を示して，サハラ砂漠の雨量を増すにはどういう方法があるかについて示唆を与えた．その際，アフリカはアフリカ合衆国でないと都合が悪いと付け加えたりした．そして，そのような時代に遭遇する若い人々をうらやましく思うというのであった．

筆者自身は，1951年8月ブリュッセルで催された第9回 IUGG 総会に出席し，雲物理部会の座長をつとめた彼に会い，個人的に話をする機会もあった．北欧人らしく丈の高い，やや太り気味の体であるが，気分的には非常にやさしく，思慮深い感じを与えられたことを思い出すのである．

（畠山久尚）